

杉古墳の火葬骨

平成九年、杉地区のほ場整備工事中に土中から白骨が見つかりました。付近は弥生時代から古墳時代の住居跡などが多数確認され、発掘調査の最中でしたが（杉遺跡）、この骨が見つかった付近は調査対象地ではなく工事が実施されていたため、急きょ工事を一時中断し、発掘調査が実施されました。

白骨の周囲には大きな石がいくつかあり、周辺を含めて精査した結果、この石は古墳の石室で、白骨は石室



石室内人骨出土状況



石室内土器出土状況



人骨取り上げ後の石室

に葬られたものであることが明らかになりました。古墳の盛り土や石室の石材の大部分は古墳築造後に破壊されて水田となっていたため、これまで古墳が存在していたこと自体が知られておらず、当時長藤の石引山古墳の一基しか存在が確認されていなかった奥津地域の古墳としては、二例目になる新発見となりました。

人骨は石室の全体に散乱しており、専門的な鑑定を鳥取大学医学部に依頼した結果、人骨の表面に亀裂

が確認されていることから火葬骨であることが明らかになりました。また、重複した部位がないため、一体分のものであると推定できました。そして、わずかに残る頭蓋骨の縫合の状況や下顎骨の筋の付着痕がやや発達していることから、壮年男性の可能性が高いと思われますが、細片のため確定はできませんでした。

「杉古墳」と名付けられたこの古墳は、石室の床面から出土した土器から、七世紀前半頃の築造と思われますが、人骨は石室の床面に置かれた川原石の棺台（棺桶を置く台石）より最大で十数cmも上から見つかっていますので、築造当初に埋葬されたものではなく、古墳築造後ある程度の年数が経過した段階で追葬されたものでしょう。

日本で火葬が行われるようになったのは、仏教の思想の影響とされて

おり、八世紀以降に普及したと言われていきます。町内においても久田下原の久田原遺跡・夏栗遺跡から火葬骨を入れた土器（蔵骨器）が見つかっていますし、沢田の加市一号墳の石室（現在は消滅）から出土した九世紀の陶器の壺も古墳に追葬した蔵骨器であると考えられています。このように古代の火葬墓も現在のように骨を容器に納めて葬る例が多いので、杉遺跡の火葬骨については、蔵骨器は見つかっていません。あるいは木製の容器に納め、容器が腐食してなくなり骨だけが残ったとも考えられますが、人骨の散布状況からこれも考えにくいです。周辺に炭や焼けた土などこの場所で火葬した痕跡もないことから、火葬骨を石室に直接散布したと考えるのが妥当です。

蔵骨器に納めず火葬骨を埋葬するという埋葬方法にどのような意味があるのか、現段階では答えが出ませんが、この地域において火葬の風習つまり仏教の思想が地域の信仰や習俗とどのように絡み合いながら受容されていったのかを考える上で、重要な例になるのではないかと思います。

参考資料：『杉遺跡』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733